

## コミュニケーション・オン・エンゲージメント（COE）

2020 年 10 月 16 日

国際基督教大学（ICU）はキリスト教の精神にもとづき、「国際的社會人としての教養をもって、神と人にとり奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資すること」を目的として、1953 年に創学されました。

人種、宗教、国籍を問わず、すべての学生を平等に受け入れている ICU では、開学以来、新入生が一人ひとり入学式で「世界人権宣言」を尊重することを誓う「学生宣誓」に署名します。

このように、ICU がグローバル・コンパクトの掲げる原則を支持することは、大学の理念と一致しており、特に「人権擁護の支持と尊重」と「環境に対する責任のイニシアティブ」の二点に関しては、具体的に学内で実践すべく日々努力しております。

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」（事業期間：2014 年度～2023 年度）に採択された本学の取組『信頼される地球市民を育むリベラルアーツのグローバルな展開』は、2018 年 2 月 28 日に公表された中間評価において、最高評価の「S」を獲得しました。今後も、「信頼される地球市民」として行動し、持続可能な成長を実現するための世界的な枠組み作りに参加する人材の輩出を目指し、今後もグローバル・コンパクトを支持していく所存です。

学 長 岩切 正一郎

## 国連グローバル・コンパクトを促進する活動の実施状況 (2017 年 12 月～2019 年 11 月)

### 1. 人権

#### (1) 人権セミナー

本学では、学生、教職員をはじめとする全ての ICU 構成員の誰もが、安心して学び、研究し、働き、生活できるようにするために、構成員一人ひとりが「人権」を自分のこととして捉え、そして考えることを旨とした人権セミナーを毎年 12 月の人権週間に合わせて実施し、学生や教職員の間に浸透し、成果を上げています。

このセミナーは、各界で活躍している方に、自身の仕事や専門領域に関して人権の視点で語っていただくことにより、日常生活の中に存在する人権問題を学生と教職員が認識する機会とすることを目的として開催し、大学のコンヴェンションアワーという時間帯に実施しています。このコンヴェンションアワーは、学生と教職員と一緒に集まることができるように、授業や予め許可されていない活動は行わないことになっており、学内の構成員全員が参加できるような時間帯に毎年開催されるこの「人権セミナー」は、本学の人権に対する歴史的、伝統的な取り組みとして長年実施され、日常生活の中での人権に対する意識をどのように醸成していくかに焦点をあてています。

学生の参加を促すために、学生によるポスターを日本語・英語で学内に掲示し、当日の同時通訳は通訳の訓練を受けている学生たちが行っていますが、これらは、本学の特徴である「日英バイリンガリズム」と「(大学構成員の)多様性」に鑑みての配慮であり、人権セミナーが大学構成員全員に向けたメッセージであることを示し、上記の作業に関わる学生たち(教員も含む)が本セミナーやそこで扱われるテーマを一層の自分のこととして捉える機会になっています。

#### 2017 年 12 月 8 日 第 20 回人権セミナー「『あなたの問題』から『私たちの共生の問題』へ ー共に学び共に生きる共生社会のために」

本学の同窓生で現在東京大学大学院教育学研究科バリアフリー教育開発研究センター特任助教の二羽泰子さん(2003 年卒業)を講師に迎え、視覚障がいをもちながらの大学生活で気付いたことを振り返りつつ、障害のある人となない人が共生できる社会の実現に必要なことについて、講演が行われました。障がいをめぐる問題がない社会の実現には、誰もが問題を自分の問題として考えることが欠かせないとし、講演の最後には「障がいなどの『差異』のある人をめぐる問題が、その『差異』にあると思っているうちは、問題は解消されません。誰もが自分の問題と考えたときに、共生できる可能性が生まれてくると思います。障がいのある人となない人が共に共生を選択し、その過程で生じる問題を自分の問題として取り組めるなら、差別なく共に学び生きる社会は遠くないはずです」と、参加者に思いを伝えました。

質疑応答の時間には、障がい者差別解消法が施行された後の変化、また二羽さんが国際協力などにも携わっていたことから、その活動内容に関する質問などが学生たちから挙がりました。

#### 2018 年 12 月 7 日 第 21 回人権セミナー「インターネット上での差別とハラスメント」

社会心理学者の高史明氏を講師に迎え、近年、インターネット上を中心に、外国籍や外国にルーツを持つ日本の住民に対する差別的な言説が盛んに流布される状況、特に、在日韓国・朝鮮人に対する偏見や差別に注目し実施してきた高氏の研究をもとに、幾つかの差別事件も交えながら、自分たちが加害者にならないための道筋を考えました。

高氏は、SNS、特に Twitter 上に投稿される差別的な発言について言及し、「ボット」と呼ばれる自動で情報を投稿する仕組みが利用されていること、また情報の拡散されやすさは正しさによって決

まるのではなく、具体的にイメージしやく感情をかき立てやすいかどうかに影響されるものであると、例を挙げて説明。加えて、最初に投稿された情報が、拡散される過程で脚色されるなどして、さらに感情をかき立てる内容に変異していくことがあるため、自分にとっては冗談であり面白い情報であっても、それが差別につながっていく場合があることをよく理解し、良識をもとに行動して欲しいと参加者に呼びかけました。

## (2)教職員向けセミナー

### 2018 年 10 月 11 日 スタッフディベロップメントセミナー (SD セミナー)

東京大学バリアフリー支援室長で同大学准教授の熊谷晋一郎氏を講師に迎え、SD セミナー「ユニバーサルな情報提示のために」を開催しました。

本学は、障がい学生支援に関する基本方針を定め、特別学修支援室が窓口となり身体障がい（肢体不自由・視覚障がい・ろう/難聴）、学習障がい、発達障がい、精神障がいのある学生に合理的配慮を提供しています。特別学修支援室では学生、教職員、関連部署等と連携してユニバーサルな学修環境整備のための啓発活動も行っており、今回はその活動の一環として開催されました。

講演の前半では、障がいのある人もない人も平等に情報を共有するための「情報保障」のあり方を中心に説明がありました。熊谷氏は、「コミュニケーションの障がいは、ある人に起因するのではなく、人と人の間に発生するもの」と強調し、特に ASD（自閉症スペクトラム）の人について、輝度に合わせて瞳孔の調整が難しく、まぶしさが強調されてしまう視野の特性、文字について読みやすいフォントと読みづらいフォントがあることや、聴覚についても音の反射による残響音を必要以上に敏感に捉えてしまうなど、複数の事例を紹介しながら、こうしたことを理解した上で、適切なコミュニケーションを取ることが必要であると述べました。また講演の後半では、情報保障の話を踏まえて、障害のある学生からどうしたいのかを引き出すための意思決定支援についての説明がありました。

当日参加した職員からは「これまで関わった学生についてわからなかったことが腑に落ちた」「伝えたいことをうまく説明できない学生のことを理解する上で役立つ内容だった」などの感想がありました。

### 2019 年 2 月 8 日 ファカルティ・ディベロップメント (FD) セミナー

富山大学アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長で、同大学准教授の西村優紀美氏による FD セミナー「発達障害学生に対する支援の在り方」が開催されました。

西村氏は、4 つの発達障害、SLD、ADHD、ASD、DCD について、その特性とそれぞれの発達障害のある学生の特性が大学生活でどのような困難さとしてあらわれるのか、障害学生に対する合理的配慮の考え方と対応方法をどのように決定していくのかを具体例とともに説明しました。

さらに、富山大学における支援体制について、実際の事例を元に説明し、学ぶための環境を整える事と、学生と教職員の対話の大切さを述べました。

## (3)国連アカデミックインパクト

### 2018 年 12 月 8 日「世界人権宣言 70 周年：国際基督教大学平和研究所主催シンポジウム ICU からの再訪」(国連アカデミックインパクト公開イベント)

本学は全学生が入学に際して世界人権宣言の原則に立って大学生活を送る旨の誓約書に署名を行うなど、世界人権宣言とは深い繋がりを有することについて、平和研究所の笹尾敏明所長・教授（メジャー：教育学、平和研究）と本学の新垣修教授（メジャー：法学、平和研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、公共政策）より説明され、その後、平和学、国際法、教育現場の 3 つの視点から世界人権宣言への再訪へと続いていきました。

「平和学からの再訪」では、日本学術振興会特別研究員であり、本学博士後期課程の秋山肇さんが、平和学の解説とそれに基づいた世界人権宣言第 1 条の再考、そして最後に ICU に求める役割を述べました。「国際法からの再訪」では、本学大学院の卒業生でもある桜美林大学の滝澤美佐子教授より、自身の世界人権宣言の出会いについて話があった後、国際法の視点から世界人権宣言について再考が行われました。「教育現場からの再訪」では、本学学部・大学院の卒業生であり、関西学院千里国際中等部・高等部教員の野島大輔先生が、中等教育現場における世界人権宣言に関連した取り組みについての紹介と、教育現場の教員として世界人権宣言を再考しました。

後半は、本学の西尾隆教授（メジャー：公共政策、法学、日本研究）よりコメントがあった後、新垣教授をファシリテーターとしてコメンテーターと登壇者 3 名を交えてのパネル・ディスカッションが行われ、現在の人権問題についての意見交換とこれからの世界人権宣言のあり方についての議論が行われました。終盤には、本学学生を含めた参加者との間で、質疑応答や意見交換が行われました。このシンポジウムでは主に日本語が使用され、日英の同時通訳も行われていましたが、通訳担当者 2 人もまた本学卒業生であるなど、本学ならではの世界人権宣言への再訪が行われました。

#### (4) イベント・シンポジウム

##### 2017 年 12 月 8 日「アイヌを生きる～人権問題を考える～」

世界人権デーを直前に控えた 12 月 8 日（金）本学の同窓生で仙台を拠点にシェイクスピア作品を演じる劇団「シェイクスピア・カンパニー」主宰の下館和巳さんと、阿寒アイヌ工芸共同組合専務理事を務め、ユーカラ劇脚本・演出家、ロックバンド歌手、アイヌ舞踏家など複数の顔を持つ秋辺デポさんのトークイベント「アイヌを生きる～人権問題を考える～」を開催しました。

このイベントは、来年より「シェイクスピア・カンパニー」が、アイヌを題材にシェイクスピアの悲劇「オセロ」の公演「アイヌ オセロ」を行うことが決定したことを受け、大学とさまざまなセミナーやワークショップなどを開催している縦寮・楓寮に住む寮生を中心とした学生団体「ICU Peers in Mitaka-no-mori (IPM)」が、下館さんに依頼し、開催に至りました。

イベントは、下館さんと秋辺さんの対話で始まり、「アイヌ オセロ」の公演を行うことになったいきさつや、脚本作成、アイヌ民族の現状などについて語りました。

秋辺さんは、「アイヌ民族の差別は 150 年続いている。これまで続いている差別は、劇というドラマの中で伝えることに意味がある。被害者だけの立場で言い返すと争いになり、仕返しになってしまう。だから今回アイヌ・オセロの制作に協力することにした。シェイクスピア好きの人はもちろん、アイヌ民族やシェイクスピアを知らない人も、この公演を見て何かを感じてもらいたい」と語りました。

質疑応答の時間には、参加した学生たちから多数の質問があがりました。「アイヌ民族に関心があるが、アイヌでない自分が語るのは適切なのか」、「最近、社会の多様性が重要であると言われるが、こうした現状をどう見ているのか」などの質問に対して、秋辺さんから、自身の経験などを踏まえて回答がなされました。またイベント終了後も学生たちが秋辺さんと下館さんを囲み、劇の演出に関すること、アイヌ民族、日頃の自分の悩みなどさまざまな質問や相談を投げかけていました。

##### 2018 年 6 月 9-10 日「アイヌ 旺征露」東京公演

本学とシェイクスピア・カンパニー共催「アイヌ 旺征露」東京公演が行われ、両日で計 600 名の観客を得て、盛況のうちに終了しました。

シェイクスピアの悲劇「オセロ」を原作とし、黒人の主人公をアイヌ民族に置き換えて人種問題を描く翻案作品で、そのテーマは、人権を尊重する本学の理念と合致するとして、共催が決まりました。劇団のはからいにより、本学の学生は無料で招待されました。



脚本・演出はシェイクスピア・カンパニー主宰 下館和巳氏（本学教養学部 1979 年卒。大学院博士後期課程在籍中に東北学院大学に奉職）。この作品ではアイヌ民族のアーティスト秋辺デボ氏を共同演出に迎え、「アイヌ民族」の踊り子たちと「和人」の役者たちが共演しました。

演出の両氏は、「アイヌ民族への差別はおよそ 150 年続いています。かつて何があったのか、ドラマでこそ語れる真実がある」（秋辺氏）、「アイヌ民族やシェイクスピアを身近に感じてほしい」（下館氏）と本番に臨み、幕が下りた後、観客は役者たちの迫真の演技に惜しみない拍手を送りました。

## 2018 年 6 月 9 日「平和とダイバーシティ：大学における LGBTQ\* の人々の受け入れの促進に向けて」

在日フランス大使館・アンスティチュールフランス日本、ICU 平和研究所とジェンダー研究センターの共催で「平和とダイバーシティ：大学における LGBTQ\* の人々の受け入れの促進に向けて」と題したパネル討論会が、2018 年 6 月 9 日（土）に開催されました。本学ダイアログハウス国際会議場には、80 人ほどの学生、研究者、大学関係者、一般の方が参加し、日本語・フランス語で討論が進められました。

今回、本企画を主導された本学アムール＝マヤール・オリビエ准教授（メジャー：文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究）が司会を務め、最初に本学日比谷潤子学長が開会の挨拶をフランス語で行いました。

第 1 セッションでは日本における LGBTQ の人々に関するドキュメンタリー映画が約 10 分間上映され、その後日仏両国から招いた 4 名のパネリストによる「ダイバーシティを創造力の源泉とし、学生と大学の教職員の益とするには？」についての議論が行われました。第 2 セッションでは、日本の LGBTQ の学生たちが学校で直面する問題に関する動画を上映後、活発な質疑応答や意見交換が行われ、ローラン・ピック駐日フランス大使が閉会の挨拶を述べました。

本イベントでは、「個性や多様性を認め合う」ことの意義について語られました。また、LGBTQ の人々やコミュニティが目に見える/見えない形で差別や排除されことなく、受け入れられる社会環境のあり方、特に高等機関や職場における対策について議論する貴重な機会となりました。

なお本イベントは、ジェンダー研究センターによる「レインボー・ウィーク（通称 R-Week）」の一環として、行われました。R-Week は、あらゆる性自認・性的指向の学生や教職員にとって安心して心地よいキャンパス作りについて皆で考え、共有するときでもあります。毎年 6 月には、さまざまなイベントの他、ジェンダー・セクシュアリティに関心のある人が集う CGS 同窓会「レインボー・リユニオン」も行われます。

## **2. 「環境・SDGs」**

本学では、そのすべての活動においてキャンパス環境に対する敬意と配慮、キャンパス生態系維持への努力など、十全な管理に取り組んでいます。さらに、すべての構成員には、自らの営みが地域のおよび地球的環境に影響を及ぼすものであることを深く自覚し、その保全に責を負うことを求め、比類なく美しい自然と、貴重な文化遺産を擁するこの環境を天恵の財として、次の世代に受け継げるよう努めています。

### **（1）国連アカデミックインパクト等**

#### 2018 年 1 月 17 日 "SDGs: UNDP and Human Security"

国連アカデミック・インパクトの一環として、本学新垣修教授（メジャー：法学、公共政策、ジェンダー・セクシュアリティ研究、平和研究）の授業「地球市民社会論」において、国連開発計画

(UNDP) 駐日代表の近藤哲生氏が、"SDGs: UNDP and Human Security"をテーマに公開講義を行いました。

近藤氏は、"Development"の語源や人間の安全保障の意義、SDGsにおけるUNDPの取り組みなどに触れるとともに、コンボやチャドにおけるプロジェクトの実践を紹介したうえで、「最善の紛争予防は開発である」と強調されました。

講話の後には、参加者から「世界の貧困状況を正確に測る手段はあるのか」、「気候変動に対するUNDPの取り組みは何か」といった質問がなされるなど、意見交換が活発に行われました。

#### 2018年5月29日 "Your UNITED NATIONS: transforming our world through SDGs as CHANGEMAKER"

5月29日(火)、吉川元偉特別招聘教授(前国連大使)の「国際連合・国際機構論」の授業で、国際連合広報センター所長である根本かおる氏を招き、"Your UNITED NATIONS: transforming our world through SDGs as CHANGEMAKER"と題して英語による国連アカデミックインパクト公開講演を行いました。

根本氏は、持続可能な開発目標(SDGs)\*達成のために私たちに何ができるかという観点で、世界で起きているグローバルな問題から、国際連合広報センター東京の活動についても説明しました。

まず、SDGs達成のためには、立場の違う人々それぞれが、チェンジメーカーになりうること、また、SDGsの達成には政府と民間機関の参画が不可欠であり、SDGsを広める活動のユニークな例として、東京都と吉本興業の取り組みを紹介しました。そして、2020年の東京オリンピックにより国外からの来訪者が増えることで、ジェンダーの平等など、SDGsの未達成項目を鑑みる良い機会になるのではないかと述べました。

講演には、多くの学生と教職員も参加し、国連と今後の日本の関わりについて熱い議論が交わされました。

#### 2018年5月31日 「ジャマイカの外交政策－小島嶼国の視点」

吉川元偉特別招聘教授のクラス「国際組織論」に、クレメント・フィリップ・リカルド・アリコック駐日ジャマイカ特命全権大使を迎え、講演会が開催されました。この講演会は、「国連アカデミック・インパクト公開イベント」の一環として、本学の東ヶ崎潔ダイアログハウスにて行なわれました。

クレメント・フィリップ・リカルド・アリコック駐日ジャマイカ特命全権大使は、「ジャマイカの外交政策－小島嶼国の視点」をテーマに、ジャマイカの地理、歴史から、所属している組織、カリブ共同体(Caribbean Community: CARICOM)、小島嶼国連合(Alliance of Small Island States: AOSIS)、カリブ海地域(Caribbean Forum of the ACP States: CARIFORUM)等の説明を通し、ジャマイカのような小国が他国とどのような連携、外交を行なっているかを説明しました。講演の最後のディスカッションコーナーでは、学生からも多くの質問が投げかけられ、学生の関心の高さが伺えました。

#### 2017年12月14日 「気候変動とSDGs ディベート：ブラジルの役割」

吉川元偉特別招聘教授(前国連大使)の授業「国際関係ディベート」にて、アンドレ・コヘア・ド・ラーゴ駐日ブラジル特命全権大使が、「気候変動とSDGs ディベート：ブラジルの役割」と題する講演を行いました(使用言語は英語)。ラーゴ大使は、気候変動枠組条約と「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」をブラジルの首席交渉官として担当されています。

ラーゴ大使は、1970年代に始まりその後SDGs（持続可能な開発目標）と気候変動枠組条約につながった環境問題に関する国際的努力について説明され、その中でブラジルが果たした役割にも触れられました。そして、新興国や開発途上国を含む国際社会全体が、グローバル化による恩恵を享受しながら、持続可能な開発を実現していくことの難しさについても述べられました。また、ラーゴ大使は吉川特別招聘教授とともに、外交における実践的交渉術について、現場の経験を踏まえたお話をされました。

会場には、吉川特別招聘教授が担当する「国際関係ディベート」を履修している学生に加え、教員、学生が参加しました。気候変動と開発というグローバルな課題に対し、さまざまな開発段階にある各国がどのように取り組むことが出来るのかを考える非常に良い機会となりました。

#### 2017年12月14日「ワシントン条約の現状とその課題」

12月14日（火）、植田隆子教授（メジャー：政治学、国際関係学、元外務省EU代表部次席大使）の授業「国際機構論」で、特別公開講演「ワシントン条約の現状とその課題」が行われ、経済産業省でワシントン条約を主管する中野潤也氏（経済産業省貿易経済協力局貿易管理部野生動植物貿易審査室長）が講演を行いました。

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存のための国際規制を約すワシントン条約について、その概要や運用の現状、同室長が出席された本年11月末の国際会議の様態なども含め、非常に興味深い講演内容が参加者の関心を集めました。

#### 2017年12月21日「外務省 外交講座」

本学植田隆子教授（メジャー：国際関係学・政治学、元外務省EU代表部次席大使）の「国際機構論」のクラスにおいて公開講演「外務省 外交講座」が実施されました。

本学卒業生の高林宏樹外務省国際協力局気候変動課交渉官から、「気候変動と国際機構」をテーマに、（１）気候変動問題とは何か、（２）同問題を扱う国際機関、（３）気候変動枠組条約事務局の任務、（４）気候変動条約事務局と気候変動交渉、（５）京都議定書からパリ協定へ、（６）気候変動交渉の現状と今後の課題、について、わかりやすい解説をしていただきました。

また質疑応答の時間では、学生から京都議定書の今日的意義、パリ協定に対する米国の態度、気候変動から見たエネルギー源など多数の質問が出され、丁寧かつ具体的な回答に、学生たちは真剣に耳を傾けていました。第二部では、外務省の仕事について、ご自身の経験も踏まえ、本学卒業生としての観点も含めた説明がなされ、外交官を希望する学生などからの質問に対し、非常に参考になる回答がなされました。

#### (2)イベント

##### 2019年5月13日～5月19日 E-weeks（ICU環境意識週間）

E-weeks は、ICU サステナブルキャンパス委員会学生ワーキンググループ SUSTENA（ICU SUSTENA）が中心となり、本学キャンパス内の環境問題の改善や学生の環境意識の向上を目指して開催しているものです。

今年は、映画鑑賞会、フリーマーケット、自然観察会、環境NPO団体の講演会、ICUの地元、三鷹の食材を使用した地産地消ビザパーティー、環境思想についてのトークセッションが行なわれました。



### 2019 年 10 月 7 日～10 月 31 日「Connecting Dots, Collecting Distances」

昨年の秋から今年の夏までイギリス、スウェーデン、フィンランドへ交換留学をしていた 3 人の在学生が、環境問題への懸念や、社会の大量消費へ疑問を感じたことから、人と人とのつながりや、人と物、そして環境に関する自身の留学での学びを多くの人と共有するために「Connecting Dots, Collecting Distances」というプロジェクトを立ち上げて、10 月 7 日（月）からさまざまなイベントを開催しています。

このプロジェクトは、本学学生寮のコミュニティ活動を支援する制度を利用して行われ、イベントでは、大学本館 2 階ラウンジおよび縦寮・楓寮の共同リビング＆ダイニング「ウイステリアホール」で、展示会「つながりのデザイン展」を開催。イギリス、スウェーデン、フィンランドでの経験を、人と人、人と物などのつながりを表す 7 つの動詞「繋がる、見つめ直す、交わす、繕う、分かちあう、巡る、選ぶ」でまとめたポスターを展示しました。また、8 日（火）には一般社団法人エシカル協会代表の末吉里花氏を招いてのトークイベント「『わたし』と『もの』の付き合い方」を開催したほか、31 日（木）まで図書館で「生活」と「社会」のつながりを見つめ直すきっかけを与えてくれる書籍を紹介する企画展示「ゆたかな暮らしをまるかじり」が、行われています。

イベントを主催した 3 人は、「このイベントを通して、少しでも多くの人々が環境問題や社会問題を自分事として捉えてくれたり、自分でも小さな変化を起こせるということを実感してもらえたらと思っています。また、そうして問題意識を持った人たちが繋がれる場を作り、一緒に楽しみながらアクションを起こしていきたいと思います」と、このイベントの抱負を語ってくれました。

また、今後のアクションの一つとして、地球の環境や SDGs についても学べる絵本『じゅんぴはいいかい?：名もなきこざるとエシカルな冒険』（山川出版社）の英語への翻訳を ICU 生で行うことを計画中です。

### 2019 年 11 月 15 日 第 3 回グローバル投資コンテスト 優勝

ブルームバーグ L.P. 社が学部生・院生を対象に開催した「第 3 回グローバル投資コンテスト」の表彰式が行われ、本学の教養学部 3 年生 3 人のチームが優勝しました。

このコンテストは、金融情報の最先端に触れながら独自の視点で市場を分析し、投資パフォーマンスやポートフォリオの構成や銘柄の選定基準といったレポート内容で競い合うものです。3 回目となる今回は、ESG 投資をテーマに、28 大学から 59 の学部生・院生のチームが参加しました。

3 人は、2018 年度冬学期に開講された ESG 投資を主要なテーマとした金子拓也准教授（メジャー：経営学、開発研究）の「経済学・経営学特論」（本学「責任あるグローバル経営者・金融プロフェッショナル養成プログラム」の授業の一つ）の履修生で、授業を通して ESG への理解を深めていました。これが大きな要因となり、審査員から「プロから見ても ESG の本質をとらえてファンドコンセプトを練りあげた」と、高い評価を得て優勝を勝ち取りました。

### (3) 太陽光発電・学内施設

2015 年より開始した本学那須キャンパスにおける太陽光発電事業は、CO2 削減による環境負荷低減への取り組み、所有資産の有効活用、太陽光発電により生じる収益を学生支援のために活用することを目的として運営しています。2018 年度は 3,017,527kWh を発電し、自然エネルギー利用の一端を担うと同時に、収益を学生へと還元し、教育活動の充実へ寄与しています。

2018 年 11 月に竣工した新体育館は、自動開閉式換気窓による外気取り入れ、高効率の冷温水発生装置の設置など、環境負荷を軽減する設備を採用しています。

以上